

語り伝えたいこと(1)——続・榎火を囲んで——
ほだび

ダンコウバイ、ミツマタ、クロモジの花を壺に生ける

——壺は心の象徴——

公益財団法人育てる会 会長 青木 孝安

4月4日、山村留学生の入園の集いが行われた。
集いの最初に、子供たち一人ひとりが、ダンコウバイの花枝を持って会場に入場し、一つの壺にそれを挿し飾り、それから集いが始まった。



八坂美麻学園



大岡ひじり学園

私は、この、ダンコウバイの花枝を、一つの壺に飾ることの意味について、子供たちや同席した保護者に詳しく説明した。

それは誓いの儀式

「ダンコウバイの花は、信州の山村で、春、一番先に咲く山の花です。この花枝を、君たち一人ひとりが一つの壺に飾る意味は、ダンコウバイの花が咲いている今から来年の、再びダンコウバイの花が咲く時まで、一年間、皆で心を一つにして生活しよう、と言う意味です。一つの壺に挿し飾るのは、心を一つにして、助け合い、励まし合おう、という約束の意味です。これは、一年間、皆で協力して過ごそうという「誓いの儀式」と言ってもいいでしょう。」

50年も昔の話——一本の杉の丸太からの箸作りに原点が

それは、50年程も昔の夏の活動の時であった。開村の集いとして、杉の木から箸を作る活動を行った。

庭先に、直径30cm、長さ25cmほどの杉の木の丸太を置き、その周りに子供たちを座らせた。子供たち一人ひとりには、小さな木工ナイフを持たせた。そこで私は、杉の丸太を指さして、子供たちに語った。

「これから、この一つの杉の木から、君たちが食事をするときの箸を作ろう。私がこの杉の丸太を、細く割ってあげるから、君たちはナイフを使って、自分の箸を作ろう。自分が一番使いやすいように、自由に作ってよい。世界に一つしかない、自分の箸を作ろう。それを使って命をつなぐ食事をするのだ。大切なことは、一つの本を分けて作ったということを忘れないでほしい。一つ丸太を分け合って、命をつなぐ箸を作るという意味は、心を一つにして助け合い協力して生活するという約束の意味だ。これから辛いこと、悲しいこと、時には争いがおこるかもしれないが、そんな時は、この、一つの本を分け合ったことを思い出してほしい。」

私はこのように語って、鉦^{ナタ}で杉の丸太をできるだけ細く割り割り、それを子供たちに、2本ずつ配った。子供たちはナイフで、夢中になって箸作りを始めた。

これが、育てる会箸作り活動の原点である。

現在でも、育てる会では、活動の開始に当たっては、どこの支部でも箸作りの活動を行っている。箸作りは育てる会の伝統的活動として定着している。ただし、材料は諸事情により、木材の代わりに、入手が容易な竹を用いるようになった。よしんば、活動材料が竹に変わったとはいえ、一つの物を分け合う、つまり一本の竹の棒を分けあって箸を作るという趣旨は忘れてはならないことである。箸作り活動の核心はここにあるはずである。昨今、こうした連帯心への問いかけ、誓いの儀式性も省略され、専ら、竹の箸作りという活動のみが行われている。

長い年月の間には、これもまた、やむを得ないことのように思う。しかし、指導

者がこの活動の原点、裏に秘められた意味を知り、自信を持って指導に臨めば、その自信は確実に子供に伝わるものだ。これが指導力と言うものである。

指導者、保護者へ望むこと——壺が象徴——

入園の集いで、心に深く訴える活動はないものかと考えた。それが春一番の花を壺に挿し飾る活動であった。花はその土地の花であれば何でもよい。兵庫県神戸学園ではミツマタの花枝を、島根県大田学園ではクロモジの花枝を使うと聞いている。飾る壺は、飯盒でもよい、登山靴でもよい。この活動の奥に秘められた意味は、一つの杉の木の丸太から箸を作る活動と意味は同じであることを知ってほしい。箸が花枝であり、杉の丸太は壺である。大切なことは、子供各自が持った花枝を、「一つの壺」に挿し飾ることである。一つの壺に飾ることは、一年間、皆で力を合わせて生活するという、誓いの印^{シルシ}である。壺は心の象徴である。願わくば、最後に、指導者が、この心の象徴なる壺を高く掲げ、壺の意味を静かに説明するなとして、会場全員の、内なる心を、「契り^{ヤキ}」の世界へと高めてほしいものだ。

（木材を分け合う箸作りの活動は、友人の信州大学名誉教授関谷敏行氏の助言によるものである。

関谷教授からは、箱膳制作活動等、有益な助言、ヒントをもらって来た。）